

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：34601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2012～2016

課題番号：24617024

研究課題名（和文）満洲における日本演劇「能楽」の活動実態調査研究

研究課題名（英文）Reserch about real Japanese NO activity in Manchulia

研究代表者

王 冬蘭（OU, Toran）

帝塚山大学・経済学部・教授

研究者番号：80319920

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：満洲における能楽について、いくつかの課題について調査し、明らかにした。研究会などで口頭発表や講演を行った。「大連にあった幻の能舞台 一九四五年まで現地における能楽活動の場所」、「満洲の撫順における能楽 梅若謡曲師範梅田富三郎親子二代を中心に」、「満洲と大連における梅若流の能楽活動」、「森川荘吉と大連能楽殿・水道橋能楽堂」という論文等にまとめ、論文発表を行い、社会に発信した。

研究成果の概要（英文）：In the paper ,I summarize theme in list below and presented it at “Research of art history conference” “Noh stage in Dalian Noh activity place at local until 1945” “Noh in Fushun Manchuria-with a focus on Umeda Tomisaburo ,Father and Son,Two Generations of Umewaka school Utai Teachers” “umewaka school Noh activity in Manchuria and Dalian” “Morikawa Shokichi and Dalian Noh stage・suidobashi Noh stage” .

研究分野：藝術学

キーワード：満洲 大連能楽殿 撫順能舞台 森川荘吉 大連能楽殿と水道橋能楽堂

1. 研究開始当初の背景

戦前、満洲における日本代表劇—能楽の展開は、現地日本人社会で展開された。日露戦争中から一九四五年の終戦までの間、満洲の各地で、観世流、宝生流、喜多流及び当時の梅若流は継続して様々な活動を展開していた。たとえば、謡曲師範が主宰した社中の稽古、以上各流の満洲支部の設置、様々な名義での謡会、上演会の開催、大規模な能楽公演などの実施が行われた。また、大連や撫順には常設能楽堂や能舞台も建設され、能楽同人誌『満鮮謡曲界』『満洲梅若』も大連で発行された。満洲における能楽は、日本国内の能楽界とつながり、日本国内の能楽史と切り離すことが出来ないもう一つの近代日本能楽史であると考えられる。

研究開始の当初では、この方面に関する研究は中国側では全くなされていなかった。日本側においてもあまり展開はされておらず、中嶋謙昌氏の「大連能楽界の形成—二十世紀初頭の植民地都市と能楽」、仲万美子氏の「歌舞伎、文楽、能楽の大連公演(1935年)は誰によって鑑賞/支援されたか—現地刊行の新聞報道記事からみた分析」ⁱⁱをあげられる程度である。以上の研究者により、研究の緒についた時期であった。

2. 研究の目的

本研究は、時代の流れを縦軸、地域範囲を横軸として、一九四五年までの満洲の各地で各流の能楽組織、社中の状況、能楽公演、各流上演、稽古の場所としての能楽堂、能舞台、稽古場、能楽に参加した人々、謡曲や狂言の中国語への翻訳状況などを調査し、満洲における能楽展開の実態を考察し、明らかにすることが本研究の目的である。また、当時の植民地満洲における能楽活動は、当時の特別な歴史背景の中で行われた文化活動であった。当時、日本の国家意識の高揚と「国粹」芸術としての能楽の普及、発揚することとの関係についても考察し、明らかにしたい。

3. 研究の方法

計画に沿って以下の調査研究項目を調査した。

- ・満洲各地の能楽公演の実態調査。
- ・満洲各地の能楽関連の組織で能楽社中に関する調査。
- ・満洲における能舞台事情の調査。
- ・謡曲の中国語への翻訳状況の調査。

調査は資料調査や現地調査を行った。調査、収集した資料を整理、分析、テーマを絞り、論文にまとめ、社会に発信するという研究方法を取った。

資料調査は下記の通り実施した。

(1)、当時の日本国内の能楽関連雑誌、新聞などを調べ、データを集まった。

『謡曲界』『観世』『宝生』など当時の能楽雑誌には、満洲公演、謡会、上演会及び社中

についての記事、報道が散見しており、当時の新聞にも関連報道があるので、これらの資料調査を実施した。

(2)、現地で刊行された能楽関連雑誌などを調べ、データを集まった。

戦前大連で刊行された能楽誌『満鮮謡曲界』(一九二八年から数年間の四巻、一九三三年から一九三七年まで、約五十巻)、『満洲梅若』(一九三六年から一九四二年まで約八十巻)を詳しく調査した。『満鮮謡曲界』は、一九二八年に大連で発刊されていた不定期刊行物で、数年間発行したが、諸事情により、いったん停刊された。一九三三に復刊され、月一回で、一九三七年まで持続刊行された。『満洲梅若』は、大連で刊行された梅若流の同人誌である。現在一九三六年七月の創刊号から一九四二年十二月まで、合計およそ六年半の分が日本に現存している。日本に現存している現地で発行された能楽同人誌は以上の二つしかない。

現地調査では、現地における図書館などに所蔵している関連資料の収集、調査を実施した。様々な資料を調べたが、当時の資料は、まだ整理されていないため、公開していない図書館があり、思うように進まなかった部分があったが、様々な資料を収集した。

また、現地調査では、大連における一九二二年に建造された能楽堂、一九三五年に建築された能楽殿(一九二二年に建造された能楽堂の移転)及びその他の現地能楽と関連がある場所の所在地を調査した。また、撫順における能舞台の場所の確認、ハルビンにおける稽古場の場所、各地で大規模な能楽公演の場所などを調査した。

平成 24 年度

初年度は資料収集、整理を重点に実施した。とくに『満鮮謡曲界』『満洲梅若』『満洲芸術壇の人々』ⁱⁱⁱを詳しく調べた。調査中、大連では、一九〇八年や一九一四年に宝生流、喜多流の敷き舞台は造られたという記事に惹かれた。その為に、掘り深く調べ、一九四五年までの大連における能楽活動の場所というテーマを切り込み、大連における能楽の敷き舞台、能舞台、能楽堂への変遷を追いながら考察を実施した。

平成 25 年度

主に調査、収集した資料を整理した。撫順(中国遼寧省東部の大型の炭鉱都市である)には梅若流の「梅田舞台」という常設能舞台が建設されたという記事を見出し、それについて追及した。

資料調査のほかに、撫順から引き揚げた人々からできた「東京撫順会」事務局長を通じて、当時撫順における「梅田舞台」の近所に住んでいた人々にインタビューすることができ、貴重な情報を提供して頂いた。また、撫順「梅田舞台」の建造者の息子も謡曲師範であり、彼の弟子からも情報、資料をいただ

いた。

以上の資料、情報に基づいて考察を展開した。

平成 26 年度

主に調査、収集した資料を継続して整理した。「満洲と大連における梅若流の能楽活動」というテーマについて掘り深く調べた。

平成 27 年度以降

主に調査、収集した資料を継続して整理した。満洲における能楽について資料収集を行う過程で、台湾における能楽記事を見つけ、戦前の日本統治下の植民地における能楽という視点から、それに関連する資料にも注意を払い、収集を続けた。「戦前における松山能楽界と台湾及び満洲とのつながり」という当時日本能楽界と植民地能楽展開の繋がりについて調べた。

「森川荘吉と大連能楽殿・水道橋能楽堂」というテーマについて掘り深く調べた。

4. 研究成果

数多く資料を収集、考察し、様々な研究テーマを行ったが、社会に発信した論文は下記の通りである。

①「大連にあった幻の能舞台——一九四五年までの現地における能楽活動の場所——」

本文では、一九〇八年、一九一四年に大連に出現した二つの能楽敷き舞台の存在を指摘し、それらの敷き舞台は誰により造られ、どのようなものかなどを追求している。また、一九二二年に落成された大連能楽堂の建設、移転された経緯を考察、大連能楽堂の舞台写真の存在を指摘している。また、一九三五年にできた大連能楽殿の移転事情や利用状況の考察を行っている。大連における能楽展開の場所の変遷を明らかにするものである。

②「満洲の撫順における能楽——梅若流謡曲師範梅田富三郎親子二代中心に——」

梅田富三郎は一九一六年に、梅若家の代理師範として、満洲の撫順へ赴任した。そして、三十年間近く撫順に滞在し、「嚶鳴会」という満洲における影響が大きな謡曲社中を主宰し、自宅で本格的な能舞台を作り、謡曲指導、能楽活動を行った人物である。梅田富三郎の長男梅田正太郎も、現地の二世謡曲師範として謡曲指導を行った。本稿は梅田富三郎の能楽履歴、梅田正太郎の能楽履歴、梅田宅にある常設能舞台「梅田舞台」、例えば、梅田舞台の場所、建築時期、規模、利用状況などについて考察し、明らかにするものである。

③「戦前の台湾における新作謡曲について——『台湾日日新報』『台湾新報』に掲載された新作謡曲を中心に——」

日本の植民地満洲における能楽展開について資料調査中、当時の日本の植民地台湾における能楽の関連資料を見出し、研究を広げ

て、この論文にまとめた。

本文は台湾の歴史の流れにおける新作謡曲の出現したことに着目し、知られていない戦前『台湾日日新報』『台湾新報』に掲載された新作謡曲「剣が山」、「新高山」、「国姓爺」「ステッセル」の存在を指摘し、それらの新作の作成趣旨、背景及び掲載の目的について追究するものである。

④「満洲と大連における梅若流の能楽活動」

梅若流とは、一九二一年梅若派が観世流から独立し、一九五四年まで存在した能楽の一流派である。本考察での考察対象の多くが丁度、梅若流としての活動時期にあたるので、文中では「梅若流」という表現を使うこととする。1、謡曲社中と謡曲師範、2、梅若流満洲支部、3、『満洲梅若』の刊行、4、梅若流宗家一門満洲における活動という四つの方面に分けて展開する。一九一〇年代、梅若謡曲師範たちが満洲に渡ってから、終戦まで三十数年の間、梅若流謡曲社中の展開、変遷について、梅若流満洲支部の成立、支部長や現地にいる代理支部長との関係について、梅若流の流派としての能楽同人誌『満洲梅若』の刊行事情について、梅若六郎（五十四世）が三回宗家一門をひいて大連や満洲で大規模演能の事情について考察するものである。

⑤「森川荘吉と大連能楽殿・水道橋能楽堂」

森川荘吉は、戦前、大連での約四十年間を含めると、六十年間もの能楽人生を送った。戦前の大連では、現地の能楽界の主軸的な存在でもあり、大連能楽殿の施主でもある。日本に引き揚げ後は宝生流の専務理事として、水道橋能楽堂再建の中心的人物の一人となった。本稿は1、森川荘吉の能楽履歴、2、大連能楽殿の建造事情、3、水道橋能楽堂の再建事情、4、森川荘吉による大連能楽殿と水道橋能楽堂のつながりという四つの部分から構成されている。1の「森川荘吉の能楽履歴」では、森川荘吉は十三歳頃、旧尾張藩主の息子が謡曲を習う際に森川も選ばれ稽古の開始の時期から、一九五〇年、彼の最後の能舞台までの能楽履歴を考察している。2の「大連能楽殿の建造事情」では、新しく見出された大連能楽殿の資料により、大連能楽殿の設計監督者は古賀精敏であることを指摘し、古賀精敏の建築設計歴や森川荘吉との関係などについて考察している。また、大連能楽殿の鏡板描画の担当の原田恕堂（原田光次郎）について考察し、原田恕堂が大連能楽殿の前身である一九二二年に建築された大連能楽殿の鏡板も描いた可能性があるかと推測している。3の「水道橋能楽堂の再建事情」では、森川荘吉の引き揚げ時期、引き揚げ後宝生会理事、主事になった経緯、理事として水道橋能楽堂の再建の中心人物の一人になった経緯を考察している。4の「森川荘吉による大連能楽殿と水道橋能楽堂のつながり」では、森川は大連能楽殿の施主であり、水道橋能楽堂建設の重役であったので、森川によ

り大連能楽殿と水道橋能楽堂のつながりがあった。例えば、大連能楽殿の揚幕は、水道橋能楽堂に使用された。その揚幕は森川が引き揚げの際に持ち帰った可能性が高いと考える。また、水道橋能楽堂に設置した橋掛かりの松は、森川が大連能楽殿の建造の際に考案した方法を採用したことなどを述べている。以上の考察により、森川荘吉は近代能楽史を語る上で欠かせない存在であるといっても過言ではないと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ①王冬蘭、大連にあった幻の能舞台——一九四五年までの現地における能楽活動の場所一、藝能史研究、査読有、N0205、2014 年、pp27-41
- ②王冬蘭、満洲の撫順における能楽—梅若流謡曲師範梅田富三郎親子二代中心に一、藝能史研究、査読有、N0209、2015、pp24-37)
- ③王冬蘭、戦前の台湾における新作謡曲について—『台湾日日新報』『台湾新報』に掲載された新作謡曲を中心に一、帝塚山経済・経営論集、査読無、N026、2016 年、pp97-109
- ④王冬蘭、満洲と大連における梅若流の能楽活動、査読有、近現代演劇研究、Vol. 6、2017 年、pp17-29、
- ⑤王冬蘭、森川荘吉と大連能楽殿・水道橋能楽堂、藝能史研究、査読有、N0216、2017 年、pp1-15)

[学会発表] (計 5 件)

- ①王冬蘭、大連・撫順にあった幻の能舞台——一九四五年まで現地における能楽活動場所について一、藝能史研究会例会、2013 年 1 月例会
- ②王冬蘭、戦前、満洲あたり (中国東北地方) における梅若流の能楽活動、藝能史研究会例会、2014 年 9 月例会
- ③王冬蘭、戦前の台湾における新作謡曲について—『台湾日日新報』に掲載され四曲新作謡曲を中心に一、藝能史研究会例会、2015 年 8 月例会
- ④王冬蘭、満洲における能楽—能舞台を中心に、帝塚山大学平成 27 年度科学研究費助成事業研究成果地域還元報告会、2016 年 3 月 19 日
- ⑤王冬蘭、森川荘吉と大連能楽殿・水道橋能楽堂、藝能史研究会例会、2016 年 11 月例会

[図書] (計 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称 :

発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年月日 :
国内外の別 :

○取得状況 (計 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
取得年月日 :
国内外の別 :

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

王 冬蘭 (OU, Toran)
帝塚山大学・経済学部・教授

研究者番号 :
23720089

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :

(3) 連携研究者

()

研究者番号 :

(4) 研究協力者

()

i 『藝能史研究』第一九四号、二〇一一年七月)、
ii 『同志社女子大学総合文化研究所紀要』二十八巻、二〇一一年)
iii 西創生編著、眩陽社、一九二九年。『日本人物情報大系 19』(皓星社刊) に影印所収。